CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

国内外における大学生の恋愛に関する心理学的研究の動向

― 学生相談における恋愛問題解決支援のあり方の探求 ―

The Review of psychological studies on romantic relationships of university students

― The pursuit of ways to help for clients' resolution of romantic relationship problems in student counseling ―

井ノ崎敦子，葛西真記子

INOSAKI Atsuko and KASAI Makiko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 33 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community
Naruto University of Education
No.33, Feb., 2019

原著論文

鳴門教育大学学校教育研究紀要　33，27 － 33

国内外における大学生の恋愛に関する心理学的研究の動向

― 学生相談における恋愛問題解決支援のあり方の探求―

The Review of psychological studies on romantic relationships of university students

― The pursuit of ways to help for clients' resolution of romantic relationship problems in student counseling ―

井ノ崎敦子*，葛西真記子**

*〒673‐1494　兵庫県加東市下久米 942 － 1　兵庫教育大学大学院　連合学校教育学研究科
**〒772‐8502　鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地　鳴門教育大学
INOSAKI Atsuko* and KASAI Makiko**
* Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo 673-1494, Japan
** Naruto University of Education
748, Nakajima, Takashimauji, Narutocho, Naruto-shi, Tokushima, 772-8502, Japan

抄録：本研究は，学生相談における恋愛問題解決支援のあり方を探求するために，国内外の大学生の恋愛に関する心理学的研究を概観することを目的とした。研究１では，学術情報データベースを用いて収集した国内外の査読学術論文を概観した。その結果，国外の研究論文が 45 本，国内の研究が 21 本収集された。恋愛関係進展度別に論文数を調べたところ，国外，国内ともに恋愛関係継続時の論文が最も多かった。研究１の結果，国内における事例研究が皆無であったことから，恋愛問題の解決を部分的に支援している事例研究の有無とその特徴を概観することを目的に研究２を実施した。研究２では，青年の事例研究を多く掲載している３つの学術誌（心理臨床学研究，学生相談研究，精神分析研究）から収集した。その結果，39 本の論文が収集された。また，女性クライエントが女性セラピストに対して，母親からの情緒的応答の体験不足の影響と思われる恋愛関係継続時の悩みを訴える事例研究が最も多いという特徴が見られた。これらの結果から，学生相談において恋愛問題解決を支援する際には，背景に養育者の情動的応答体験不足があることを理解した上で，セラピストが適切な情動的応答を行なうことが肝要であることが示唆された。

キーワード：恋愛関係，大学生，学生相談，心理学的研究，事例研究

Abstract：This paper reviews psychological studies on university students' romantic relationships with the goal of supporting relationship problem resolution in student counseling. In Study 1, we collected and reviewed domestic and foreign peer-reviewed papers from academic information databases. As a result, we collected forty-five foreign and twenty-one domestic papers. We counted the number of papers according to the progress of students' romantic relationships, and found that most papers concerned the continuation of romantic relationships. Because the domestic papers reviewed in Study 1 did not include case studies, in Study 2 we examined domestic case study papers on support for partial resolution of romantic relationship problems. We collected thirty-nine papers from three academic journals and found that in the case studies, female clients who experienced a lack of proper emotional responses from their mothers sought counseling from female counselors on how to continue their romantic relationships. From results of this study, we found that it is important for therapists to understand the effects of lack of clients' experiences of emotional responses from their caregivers and to help to resolve clients' romantic relationship problems with proper emotional responses.

Keywords：romantic relationship, university student, student counseling, psychological study, case study

Ⅰ．問題と目的

本研究の目的は，学生相談における恋愛問題解決支援のあり方を探求するために，国内外の大学生の恋愛に関する心理学研究を概観することである。

青年期において恋愛は重要な関心事の１つであり，その経験が発達にも大きな影響を与えることが指摘されている。そして，大学内の学生相談機関には，恋愛問題の解決を求めて利用する学生が一定数存在する（岩田，2010）。恋愛に関する実証的な心理学的研究は欧米では

1970年代頃から，日本では1980年代から始まっている（髙坂，2016b）。臨床心理学的支援においては，可能な限り，科学的根拠に基づき支援を行うことが求められる。そのため，恋愛問題で悩む学生への支援においても，従来の恋愛に関する心理学的研究で得られた科学的知見に基づき，有効な支援を行うことが求められる。

また，西平（1981）によれば，恋愛には告白時，身体接触を求める時，そして結婚の約束を求める時といった３つの危機が存在し，世間ではこれらの危機を乗り越えるための技巧の習得を勧める言及が多く見られる。しかし西平は，恋愛における危機において，一時的で表面的な技巧で乗り越えようとするのではなく，どのように動くのが，自分自身にとって誠実なのかを問うことが重要であると主張している。つまり，恋愛における心理的危機は，自己のあり方が問われて自己の安定が揺るがされる事態となることが多いが，この危機的局面において，誠実に自分自身のあり方を見つめ直せば，自己の成長を促す機会にすることができるとも考えられる。

そこで，本研究では，研究１において，国内外における大学生の恋愛に関する心理学的研究を概観することを目的とした。ただし，研究１で収集された国内研究には事例研究論文が含まれていなかった。そうしたことから，研究２においては，クライエントの恋愛問題が主訴とされていないカウンセリングの中で，クライエントが恋愛に関する悩みを訴えている事例研究を概観することを目的とした。

Ⅱ．研究１

１．目的

国内外における大学生の恋愛に関する心理学研究のレビューを行うことを目的とした。

２．方法

１）検討対象・論文収集の基準

2018年５月から７月に，大学生の恋愛に関する国内外の心理学研究の検索を行なった。国外の論文については，アメリカ心理学会が製作している心理学分野データベースPsycINFOでromantic relationshipとuniversity studentの２つのキーワードにより検索して検出された，英語で執筆された査読付き論文を収集した。国内の論文については，髙坂（2016a）を参考に，国立情報学研究所が運営する学術情報データベースCiniiで，⑴心理学系の学会誌に掲載された査読付き論文，⑵タイトルまたはキーワードに「恋愛」「性愛」「異性」「恋人」のいずれかと「大学生」または「青年」が含まれている論文という２つの基準を満たす論文を収集した。

また，本研究では，特定の他者との間での恋愛にまつわる研究に絞っており，例えば対人魅力に関する論文など，恋愛対象として意識される不特定多数の他者に対する態度に関する研究については含めないこととした。

２）分析方法

Levinger, G.（1980）は，対人関係の関与度の変容過程に関するモデルとして，ABCDEモデルを提唱している。ABCDEモデルでは，対人関係は，A（Acquaintance；知己になる段階），B（Building；関係構築の段階），C（Continuation；持続の段階），D（Deterioration；崩壊の段階），E（Ending；終焉の段階）の段階をたどるとする。そこで，本研究において，ABCDEモデルに従い，恋愛の進展レベルに応じて，恋愛関係成立前，恋愛関係成立時，恋愛関係継続時，恋愛関係崩壊時，恋愛関係崩壊後の５つに分類し，それぞれの時期にどのような研究が存在するかについて概観した。

３．結果

検索の結果，国外の研究は45本，国内の研究は21本が収集され，これらを検討対象とした。研究種別に見ると，調査研究が65本（国外43本，国内21本），事例研究と文献研究がそれぞれ，国外１本のみであった。

１）関係進展度別の論文数

国内外の論文の各関係進展度の論文数を表１に示した。

国外では，恋愛関係成立前の論文がなく，恋愛関係継続時に偏っており，40本（88.9%）となっていた。国内でも，恋愛関係継続時の研究が最も多く，15本（71.4%）であった。しかし，恋愛関係成立前に関する研究は３本

表１　関係進展度別の論文数

関係進展度	研究テーマ	国外	国内
恋愛関係成立前	恋愛の特徴	0	1
	アタッチメント	0	0
	恋愛と精神的問題	0	0
	デートDV	0	0
	ネット関連	0	0
	発達障害	0	0
	アイデンティティ	0	2
恋愛関係成立時		0	0
恋愛関係継続時	恋愛の特徴	9	9
	アタッチメント	8	0
	恋愛と精神的問題	8	3
	デートDV	8	1
	ネット関連	3	0
	発達障害	3	0
	アイデンティティ	1	2
恋愛関係崩壊時	恋愛の特徴	2	1
恋愛関係崩壊後	恋愛と精神的問題	2	1
	アイデンティティ	0	1
恋愛全体	恋愛の特徴	1	0
合計		45	21

も存在し，全体の14.2%となっていた。また，国外，国内ともに，恋愛関係開始時の研究は存在しなかった。

2）各関係進展度における研究テーマの特徴

論文の中で取り上げられた恋愛に関連する心理学的要因名に基づき，すべての論文を次の6つのテーマに分類した。恋愛にみられる様々な特徴を解明している研究群を「恋愛の特徴」，アタッチメントとの関連を検討している研究群を「アタッチメント」，恋愛関係と精神的問題との関連を検討している研究群を「恋愛と精神的問題」，恋人間の暴力であるデートDVの特徴や原因の解明を行なっている研究群を「デートDV」，恋愛関係におけるインターネット活用状況を解明している研究群を「ネット関連」，恋愛関係とアイデンティティの状態との関連を解明している研究群を「アイデンティティ」とした。これら6つの研究テーマごとの論文数を表1に示し，具体的な研究例を表2及び表3に示した。

国外の文献では，恋愛関係継続時の「恋愛の特徴」に関する文献が最も多く，9本であった（20.0%）。次いで多いのが，恋愛関係継続時の「アタッチメント」，「恋愛と精神的問題」及び「デートDV」である。一方，国内の文献では，国外と同様に，恋愛関係継続時の「恋愛の特徴」に関する文献が最も多く，9本であった（42.8%）。次いで多いのが，恋愛関係継続時の「恋愛と精神的問題」で3本であった。

4．考察

国外の論文は国内の論文の約2倍存在しており，圧倒的に国外の論文が多かった。関係進展度別に見ると，国外，国内ともに最も論文数が多かったのは，恋愛関係継続時であったが，国外では全体の約9割がその時期の論文であるのに対し，国内では約7割に留まり，国外では皆無であった，恋愛関係成立前の研究が約1割も存在していた。研究テーマごとに見ると，国外も国内も最も多かったのが，恋愛関係継続時の恋愛の特徴を解明する研究であったが，国外では，恋愛と精神的問題の関連や，デートDVなど，恋愛関係の関係性を多面的に扱う傾向が見られたのに対し，国内では，恋愛の特徴解明で約4割を占め，あとは他の関係進展度に分散しており，研究テーマの多様性はあまり見られなかった。これらの結果から，国外の恋愛に関する心理学的研究は国内に比べると積極的に行なわれているように見えるが，それは，恋愛を研究テーマとして重要と捉えている現れであること，また，国内の青年は，国外の青年に比べて，恋愛関係を形成する段階以前に達成すべき発達課題の解決が必要であるということも影響していると考えられた。

表2　国外研究における研究テーマ別の研究例

関係進展度	研究テーマ	著者	研究対象者数	研究の概要
恋愛関係継続時	恋愛の特徴	Siebenbruner, J. (2013)	197名（女性のみ）	78名（39.6%）がラフな性的関係，139名（70.6%）がデート，147名（74.6%）が恋愛関係を経験していたこと，ラフな関係をもつ者はデートや恋愛関係ももっており，ラフな性的関係がデートや恋愛関係の代わりではないことを見出した。
	アタッチメント	Creasey, G. & Ladd, A. (2004)	130名	安定型のアタッチメントを示す者は交際相手との葛藤に適切に対処する反面，回避型の者は不適切な対処を示した。
	恋愛と精神的問題	Silva, E., et al. (2017)	566名	情動統制力の低さが，自傷行為と，恋愛関係の重要な4つの領域（親密性の回避，見棄てられ不安，暴力被害，暴力加害）との関係に影響を与えることを見出した。
	デートDV	Cousins, A.J. & Gangested, S.W. (2007)	116組のカップル	異性愛カップルにおいて，交際相手の女性が他の男性に関心を寄せていると考えている男性ほど，身体的暴力によって支配していることを示した。実際よりも想像のほうが暴力に関連していることを見出した。
	ネット関連	Sherrell, R.S. & Lambie, G.W. (2013)	16名	恋愛関係で親密なほどFacebookも自己開示が深くなることを見出した。
	発達障害	Bruner, M.R. et al. (2015)	189名	ADHD患者は非ADHD患者よりも恋愛関係の関係性が良好ではないことを示している。
	アイデンティティ	Lascano, D.I.V. et al (2014)	198名	職業志向や親密性がアイデンティティの後のレベルに肯定的な影響を与えること，アイデンティティは，相互的に後の職業志向のレベルに影響を与えること，2年生までの間に職業志向は減少し，親密性が増加するが，次の2年間で職業志向は上昇し，親密性は減少する，アイデンティティは時間とともに成長する，学業成績とデートは共変動的にコンピテンシーにおいて変化することを見出した。
恋愛関係崩壊時	恋愛の特徴	Hendy, H.M. et al. (2013)	621名	関係喪失，社会的困惑，傷つき恐怖の3つの因子によって構成される，学生の恋愛関係崩壊尺度を開発した。
恋愛関係崩壊後	恋愛と精神的問題	Rodriguez, L.M. et al. (2016)	429名	約40%は元恋人と交流し，人によっては元恋人と交流することが今の関係に有害となることを見出した。
恋愛全体	恋愛の特徴	Kuperberg, A. & Padgett, J.E. (2016)	22,454名	学生らはラフな性的関係とデートを同じぐらい体験していること，男子学生は女子学生に比べてデートやラフな性的関係を経験しているのに対し，望んでいるにも関わらず継続的な恋愛関係をあまり経験していないことを見出した。

表３　国内研究における研究テーマ別の研究例

関係進展度	研究テーマ	著者	研究対象者数	研究の概要
恋愛関係成立前	恋愛の特徴	仲嶺（2015）	398 名	女性は街中での恋愛関係化開始を許容していないことを見出した。
	アイデンティティ	高坂（2013）	1532 名	307 名が恋人を欲しいと思わないこと，その理由別に見ると，恋愛拒否や自信のない者は自我発達の程度が低く，楽観予期群（恋愛は流れでできる）の自我発達は高いことを見出した。
恋愛関係継続時	恋愛の特徴	河野ら（2015）	334 名	男女とも恋愛対象者への回避は異性友人よりも少なく，特に女性で顕著であること，恋愛対象者への接触回避は同性友人への接触回避よりも低くならないことを見出した。
	恋愛と精神的問題	相羽（2011）	301 名	男女共に異性不安が高いほど困ったり悩んだりする程度が高いこと，恋愛有能感が低いほど，困ったり悩んだりする程度が高いことを見出した。
	アイデンティティ	高坂（2010）	212 名	モラトリアムの者は，達成者や早期完了者よりも恋愛関係で不自由になっていると感じていること，達成者や早期完了者は，モラトリアムや拡散者よりも恋愛関係をもつことで充実していると感じていることを見出した。
恋愛関係崩壊期	恋愛の特徴	和田（2000）	239 名	関係が進展していた者ほど，崩壊時に説得・話し合い行動が多くとられ，崩壊時の苦悩が強く，崩壊後の後悔・悲痛行動と未練行動が多いこと，女性は関係が進展していた者ほど回避・逃避行動をとらないこと，関係進展度に関わらず，男性は女性よりも消極的受容行動を多くとること，最も関係が進展した場合のみ，女性の方が説得・話し合い行動を多くとり，回避・逃避行動をあまりとらないことを見出した。
恋愛関係崩壊後	恋愛と精神的問題	浅野ら（2010）	114 名	心理的離脱は首尾一貫感覚を直接的に向上させ，心理的離脱を介して未練型コーピングは首尾一貫感覚を低下させるが，回避コーピングは首尾一貫感覚を向上させ，拒絶型コーピングは首尾一貫感覚を直接的に低下させることを見出した。
	アイデンティティ	高坂（2014）	1350 名	恋愛関係が終了してもアイデンティティの感覚が低下しないこと，アイデンティティの一部である「対自的同一性」「心理社会的同一性」は交際状況に関わらず時間とともに高くなることを見出した。

Ⅲ．研究２

１．目的

研究１で示したように，国内における大学生の恋愛問題を扱う事例研究が皆無であった。しかし，恋愛が青年にとって重要な関心テーマであることを考えると，別の主訴の解決を目指すカウンセリングにおいて，恋愛問題解決支援も行われていると予想される。そこで，研究２では，カウンセリングの中で主要な問題としてではないが，青年期の恋愛問題も扱っている事例研究の有無を確認した。さらに，青年期の恋愛問題を扱っている事例研究が存在する場合，それらの事例にどのような特徴が見られるかについて概観することを目的とした。

２．方法

１）検討対象・論文収集の基準

2018 年７月から８月にかけて，「心理臨床学研究」「学生相談研究」及び「精神分析研究」の 2000 年から 2017 年刊行分に掲載されている事例研究の中で，面接の中でセラピスト（以下，Th とする）がクライエント（以下，Cl とする）の恋愛問題を支援している場面の記載がある事例研究論文を収集した。恋愛問題を扱っているとする条件として，① Cl は青年期にあたる，10 代後半から 20 代までとする，②面接の中で Cl が自らの恋愛の悩みに関する発言をするだけでなく，Th が Cl の語った恋愛での悩みに対して解決のために何らかの支援を行っている記載があること，とした。

また，本研究においても，研究１と同様に，特定の他者との間での恋愛にまつわる研究に絞り，論文を収集した。

２）分析方法

収集した論文それぞれについて，Th と Cl のジェンダー，Cl のジェンダー以外の属性（年齢と職業），Cl の主訴，親子関係に見られる特徴，及び Th による介入の記載がある恋愛問題，それに対する Th の介入の様子と Cl の反応，その後の Cl の恋愛の展開について整理した。

３．結果

収集の結果，「心理臨床学研究」から 20 本，「学生相談研究」から 11 本，「精神分析研究」から８本が収集された。

１）Th と Cl のジェンダーの組み合わせ別の論文数

Th と Cl のジェンダーの組み合わせを，男性 - 男性，男性 - 女性，女性 - 男性，及び女性 - 女性の４つに分類してそれぞれの論文数を調べた（表４）。その結果，順に３本，９本，６本，21 本となり，圧倒的に女性 Th と女性 Cl の組み合わせの事例研究が多いことがわかった。

２）恋愛関係進展度別の論文数

研究１と同じ恋愛関係進展度別の論文数を調べた（表５）。その結果，「恋愛関係成立前」が 11 本，「恋愛関係

表４　Th と Cl のジェンダーの組み合わせ別の論文数

Th と Cl の性別の組み合わせ	論文数
男性－男性	3
男性－女性	9
女性－男性	6
女性－女性	21
合計	39

表５　関係進展度別の事例論文数

関係進展度	Th と Cl の組み合わせ	論文数
恋愛関係成立前	男性－男性	2
	男性－女性	3
	女性－男性	2
	女性－女性	4
計		11
恋愛関係成立時	男性－男性	0
	男性－女性	1
	女性－男性	0
	女性－女性	0
計		1
恋愛関係継続時	男性－男性	1
	男性－女性	3
	女性－男性	1
	女性－女性	12
計		17
恋愛関係崩壊時	男性－男性	0
	男性－女性	1
	女性－男性	3
	女性－女性	0
計		4
恋愛全体	男性－男性	0
	男性－女性	0
	女性－男性	0
	女性－女性	1
計		1
合計		39

成立時」が１本，「恋愛関係継続時」が 17 本，「恋愛関係崩壊時」が４本，「恋愛関係崩壊後」が５本，そして「恋愛全体」が１本となった。なお，本研究における恋愛問題の中には, Cl が Th に恋愛感情を抱くという転移性恋愛も含んでいるが，それらは「恋愛関係成立前」に分類した。

先ほど示した Th と Cl のジェンダーの組み合わせ別の論文数とかけあわせた結果，最も論文数が多かったのは, 女性 Th と女性 Cl との組み合わせにおいて，「恋愛関係継続時」の問題を扱っている研究であり，12 本（30.8%）となった。

３）母子関係のタイプ別論文数

乳幼児の時期に，養育者（多くは母親）との間で形成する心の絆はアタッチメントと呼ばれ，その後の対人関係を形成する認知的枠組みとして子どもの心の中に組み込まれる（内田，2018）。従って，対人関係の１つである恋愛関係の持ち方にも，幼少期から続く本人の養育者, 中でも母親との関係性が影響することが予想される。そこで，本研究で収集された事例研究において，それぞれの Cl が母親とどのような関係を体験しているかについて調べた。

事例の中での記述をもとに，母親の養育態度を次の４つに分類した。母親が情緒的応答に消極的な場合を「ネグレクト」（例えば，笠井，2002），母親が積極的な精神的暴力を与えて積極的に不適切な情緒的応答をしており, Cl が母親によって支配されていると感じている場合を「支配的」（例えば，布柴，2012），それら２つが合わさったものを「混合型」（山下，2011），そして母子関係が不明なものを「不明」（例えば，和合，2011）とした。これら４つの分類それぞれの論文数を集計した結果,「ネグレクト」が 20 本,「支配的」が 12 本,「混合型」が１本,「不明」が５本となり, ほとんどの事例（33 本, 84. 6%）が，母親による適切な情緒的応答を十分に得られていない事例であることが見出された。

なお，１本のみであるが，母子関係の情緒的応答の問題が見られない事例も存在していた。

４）恋愛問題への介入と展開

恋愛問題に対して，共感的姿勢による傾聴を繰り返す方法（例えば，山中，2014）や，傾聴をした上で解釈を与える方法（例えば，青木，2004），や助言を与える方法（例えば，水谷，2007）などの介入がされていたが, 全事例研究のうち，記載がないため恋愛の展開が不明な９本以外では，不適切な恋愛関係を終了させる（例えば, 羽間, 2002), 恋愛関係を順調に展開させる（太田, 2009）など, すべて Cl が適切な恋愛関係を構築するといった効果が見られていた。

４．考察

１）Th と Cl のジェンダーの組み合わせと恋愛関係進展度

本研究で収集した論文では，恋愛関係継続時における訴えが記された事例が最も多く，特に，女性 Th と女性 Cl の組み合わせにおいて恋愛関係継続時における訴えが記された事例が最も多く見られた。恋愛関係継続時における訴えの記述が最も多かったのは，青年にとって，満足のいく恋愛関係を継続させることへの関心の高さがあらわれていると考えられる。これは，大野（1999）が指摘しているように，青年の恋愛が，交際相手の反応により自分の存在意義を確かめようとする「アイデンティティのための恋愛」の特徴を帯びやすいことも関係していると思われる。青年は，自分らしさを確認したり，自分はこれでいいのだと自己承認をすることを目的に，恋愛における交際相手からの反応を必要とする傾向が強いため，恋愛関係進展度のうちでも，関係の継続を最も重要視し，また，そこでの問題が大きな心理的危機になりやすいことが推察される。

また，女性 Th と女性 Cl の組み合わせのときに恋愛関係継続時の相談が最も多く示されていたのは，前述の「アイデンティティのための恋愛」を求める傾向が，男性よりも女性のほうが高いからではないかと考えられる。これを裏付ける指摘として，杉村（2001）のものがある。杉村は，女性のほうが男性よりも，他者との関係性の中で自己規定する傾向が強いことを指摘している。つまり，女性は，男性に比べて，関係性の中で自己規定する傾向が強いので，恋愛において「アイデンティティのための恋愛」をする傾向も強まり，ひいては，恋愛関係継続時における問題が，その女性にとっての自己規定を揺るがしかねない心理的危機となり，本研究で見られた結果につながったのではないかと推察される。

2）学生相談における恋愛問題解決のあり方

本研究で収集した事例研究の約８割において，母親による不適切な情動的応答の体験の記載が見られた。そのうちの約６割が母親によるネグレクトの体験の記載であった。母親による消極的な情緒的応答の拒否により，Cl は強い情緒的応答欲求不満を抱いたまま成長し，青年期に入って，その不満を満たすべく，恋愛関係を構築すると，深い心理的危機を迎えやすくなることは想像に難くない。恋愛関係では，交際相手に頼りすぎることなく，頼らなさすぎないといった適度なバランスを保つが求められるが，母親を頼ることをあきらめて我慢してきた青年にとっては，そうしたバランスを保つことが難しい課題となると予想される。このように，恋愛問題の背景には母親との関係における未解決な問題が影響していると考えられる。

養育者（母親が主要な養育者となることが多い）による適切な情緒的応答を得られないために，自己を確立させることができないまま，恋愛関係に突入し，様々な困難に見舞われて，心理的に苦しんでいたと思われる。恋愛問題の背景に情動的応答を受ける体験の不足があることは，傾聴，解釈，あるいは助言などの介入を通して，Th が適切な情緒的応答を行なうと，Cl が恋愛問題を乗り越えて，適応的な恋愛関係を構築できるように変化していることからもうなずける。

従って，恋愛問題を抱える背景には，養育者（その多くは母親であるが）による適切な情緒的応答を受ける体験の不足が存在するため，恋愛問題解決支援においては，Th による適切な情緒的応答の体験を Cl が得ることが重要であると考えられる。

Ⅳ．総合的考察

本研究では，学生相談における恋愛問題解決支援のあり方を探求するために，国内外の恋愛に関する心理学的研究を概観し，さらに，国内における恋愛問題を扱っている事例研究を概観した。

国外では，恋愛関係継続時における多様な研究が見られたのに対し，国内では，恋愛関係継続時の研究の領域に偏りがある一方で，恋愛関係成立前の研究も散見された。また，事例研究においては，恋愛問題の背景として，養育者との関係の問題，具体的には，母親のネグレクトによる，青年の情緒的応答を受ける体験の不足が，重要な要因として存在していることが示唆された。そして，これらの結果は，国外において恋愛関係を成立させることに困難を抱える青年はあまり存在せず，恋愛関係継続に困難を抱える青年が多いのに対し，国内において恋愛関係を成立させるのに必要な心理的条件の不足を抱える青年が多いことによるものと考えられる。

これらの違いが生じる原因としては，国外では恋愛関係を成立できるほどに自己が確立しているが，恋愛関係を継続することのできるほど自己が成熟していないことで恋愛問題を呈する青年が多く見られるのに対し，国内の青年は，自己が恋愛関係を成立できるほど確実ではないために恋愛に困難を抱える傾向を強く示すことが予想される。

今後，これらの予想を含め，恋愛問題の様相やその要因，有効な解決支援のあり方の文化差等を把握するために，国内と国外の事例研究を比較検討することが求められる。

Ⅴ．引用文献

相羽美幸(2011)．大学生の恋愛における問題状況の特徴，青年心理学研究，23，19 － 35.

青木佐奈枝（2004）．行動化の多い境界性人格障害女性の面接過程－エンパワメント中心の支援の試み－，心理臨床学研究，21(6)，575 － 585.

浅野良輔・堀毛裕子・大坊郁夫（2010）．人は失恋によって成長するのか－コーピングと心理的離脱が首尾一貫感覚に及ぼす影響－，パーソナリティ研究，18(2)，129 － 139.

Bruner, M. R., Kuryluk, A. D. & Whitton, S. W. (2015). Attention-deficit/hyperactivity disorder symptom levels and romantic relationship quality in college students. Journal of American College Health, 63(2), 98-108.

Cousins, A. J. & Gangestad, S. W. (2007). Perceived threats of female infidelity, male proprietariness, and violence in college dating couples. Violence and Victims, 22(6), 651-668.

Creasey, G. & Ladd, A. (2004). Negative mood regulation expectancies and conflict behaviors in late adolescent college student romantic relationships: The moderating role of generalized attachment representations. Journal of

Research on Adolescence, 14(2), 235-255.
羽間京子（2002）．治療的 Splitting について－非行少年の事例を通して－　心理臨床学研究, 20(3), 209－220.
Hendy, H. M., Can, S. H., Joseph, L. J., & Scherer, C. R. (2013). University students leaving relationships (USLR): scale development and gender differences in decisions to leave romantic relationships. Measurement and Evaluation in Counseling and Development, 46(3), 232-242.
岩田淳子（2010）．対人関係に関する相談　日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会編　学生相談ハンドブック　学苑社，10－12.
笠井さつき（2002）．女性セラピストの妊娠が心理療法に及ぼす影響－３事例の報告を中心として－　心理臨床学研究，20(5)，476－487.
河野和明・羽成隆司・伊藤君男（2015）．恋愛対象者に対する接触回避　パーソナリティ研究，24(2)，95－101.
髙坂康雄（2010）．大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連　発達心理学研究，21(2)，182－191.
髙坂康雄（2013）．青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達の関連，発達心理学研究，24(3)，284－294.
髙坂康雄（2014）．大学生の恋愛関係の継続／終了によるアイデンティティの変化，青年心理学研究，26，47－53.
髙坂康雄（2016a）．日本における心理学的恋愛研究の動向と展望，和光大学現代人間学部紀要，9，5－17.
髙坂康雄（2016b）．恋愛心理学特論 - 恋愛する青年／しない青年の読み解き方　福村出版
Kuperberg, A., & Padgett, J. E. (2016). The role of culture in explaining college students' selection into hookups, dates, and long-term romantic relationships. Journal of Social and Personal Relationships, 33(9), 1070-1096.
Lascano, D. I. V., Galambos, N.L. & Hoglund, W. L. (2014). Canadian youths' trajectories of psychosocial competencies through university: Academic and romantic affairs matter. International Journal of Behavioral Development, 38(1), 11-22.
Levinger, G. (1980). Toward the analysis of close relatisionships. Journal of Experimental Social Psychology, 16, 510-544.
水谷友吏子（2007）．否定的母親像にとらわれていた女子学生が示した自立の意味 - 娘から成熟した女性への変容過程 -　学生相談研究，27，216－226.
仲嶺真（2015）．大学生における街中での異性関係開始 - 男女間の相互作用に着目して -　応用心理学研究，41(1)，77－86.
西平直喜（1981）．友情と恋愛の探究（青年の世界３）大日本図書
布柴靖枝（2012）．青年期女子の自傷行為の意味の理解と支援 - 行動化を繰り返しつつ，自分らしさを模索していった女子学生の危機介入面接過程を通して -　学生相談研究，33，13－24.
大野久（1999）．人が恋するということ．佐藤有耕（編）高校生の心理：１　広がる世界．大日本図書，70－95
太田幸治（2009）．就労希望の精神障害者に対する心理的援助としての訪問面接－面接過程の考察を中心に－心理臨床学研究，26(6)，652－662.
Rodriguez, L. M., Overup, C. S., Wickham, R. E., Knee, C. R., & Amspoker, A. B. (2016). Communication with former romantic partners and current relationship outcomes among college students. Personal Relationships, 23, 409-424.
Sherrell, R. S., & Lambie, G. W. (2016). A qualitative investigation of college students' Facebook usage and romantic relationships: Implication for college counselors. Journal of College Counseling, 19, 138-153.
Siebenbruner, J. (2013). Are college students replacing dating and romantic relationships with hooking up? Research in Brief, 54(4), 433-438.
Silva, E., Machado, B. C., Moreira, C. S., Ramalho, S., & Goncalves, S. (2017). Romantic relationships and nonsuicidal self-injury among college students: The mediating role of emotion regulation. Journal of Applied Development Psychology, 50, 36-44.
杉村和美（2001）．関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：２年間の変化とその要因．発達心理学研究，12(2)，87－98.
内田利広（2018）．母と娘の心理臨床－家族の世代間伝達を超えて－　金子書房.
和田実（2000）．大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応 - 性差と恋愛関係進展度からの検討 -，実験社会心理学研究，40(1)，38－49.
和合香織（2011）．学生相談室の多面的利用についての考察 - 個別面接・グループワーク・ミーティングルームの利用を通して -　学生相談研究，32，60－71.
山中亮（2014）．青年期の故人との関係性の変容過程に関する一考察 - 恋人との死別を体験した女子学生との面接過程 -　心理臨床学研究，31(6)，999－1009.
山下親子（2011）．学生相談独自の面接構造における発達促進的なかかわりの意義－境界例水準の人格構造を有した学生との５年間にわたる面接過程をもとに－心理臨床学研究，29(2)，165－176.